

UIFA JAPON

NEWSLETTER

■主な内容

日韓シンポジウムの概要
プログラム
ソウルでの打合せ

特集 私の家族・住まい・社会 ～明日の住まいを考える～
(個人会員に聞く)

役員会の報告

■日韓シンポジウムのお知らせ

今夏は酷暑と水不足に悩まされたかと思うと、足早にきた秋。皆様お元気にご活躍のことと思います。

UIFA JAPONでは国際家族年にあたり、財団法人東京女性財団の御支援を基に、'94秋 日韓交流の会のシンポジウムを計画しました。家族・住まい・社会～明日の住まいを考える～がテーマです。隣国でありながら知る機会の少ない韓国の住まいや生活、女性建築家(KIFA)がどのような社会状況の中で活躍しているかなどを通して、日本と韓国における家族と住まいの関わりについて、基調講演・講演・パネルディスカッション・懇親会にて両国の現状と将来の展望を共に考えます。質疑応答・スライド・OHPなどや通訳を通して分かりやすく展開したいと考えています。詳細は下記の通りですので、奮ってご参加下さい。

●日韓シンポジウム “家族・住まい・社会”
～明日の住まいを考える～

日 時：1994年10月22日(土)

10:30～16:30

会 場：氷川会館(赤坂)

参加費：3000円(資料代含む)

懇親会費：10000円

申込方法：UIFA JAPON事務局まで

FAX 03-3432-6773

基調講演：鈴木成文 講演：金 鎮愛、朴 研心

小谷部育子、中島明子 (敬称略)

■ソウルでの打合せ

小川信子

10月22日の日韓シンポジウムに関する打合せのため、8月31日から9月2日まで実行委員6名で韓国を訪問し、9月1日夜“龍水荘”で打合せを行なった。

韓国側出席者は、KIFA会長金華連、副会長金福守、金仁淑、総務部長任仁王の諸氏と、講師を務められる金鎮愛、朴研心の両氏であった。

はじめ両者で歓迎、答礼の言葉を述べ、メンバー紹介の後、資料を基に打合せを行った。今回のテーマ・内容(“家族・住まい・社会”)、両者の講師の紹介、シンポジウムの進め方、懇親会の内容、来日された時の事務的な点などについてである。

テーマについては、韓国でも極めて今日的な課題であるとのことで、今回のシンポジウムに寄せる期待は両者とも大きい。この会を通して交流が深められることを願っている。きわめて友好的に意見が話し合われたが、あらかじめ訪韓して話せたことによって双方とも良い結果が得られたことと思われる。

なお、韓国側でこの話を円滑に進めて下さる力となった池淳、元正洙の両氏にもお会いし、報告が出来た



のは幸いであった。両氏は実行委員の飯島さんと交流のある方で、日本についても理解が深く、今回、賛辞をもって金会長に橋渡しをして下さった。

「選んだ住宅はバリアフリー」

南大沢ベルコリーヌに暮らし始めて5年が過ぎた。父が亡くなって3年が過ぎたころ、郷里に一人で住んでいた母は元気なうちに、妹と私の居る東京での暮らしを始めたいと言い出した。こうして私の家族との同居ができる住宅探しが始まった。丁度パブルの最初の時期、落選が続くなか、とにかく住宅を確保することを大命題に、様々に検討した。なかで優先したのは、違う家族と一緒に生活することから、個人が各個室で十分に安らげる広さを確保すること。母の部屋にトイレがついていることだった。3LDK、約120㎡、全室フローリングは人気がなく、倍率も低かったため運良く当選できた。高齢者との同居を意識した訳ではなかったが、5階建てでEV付き、住宅内の廊下、扉も広く、各部屋と廊下、トイレとの段差なし、という車椅子の使用も可能な加齢対応型住宅であった。もっとも現在75才になった母は、水泳・合唱……年を加える毎に元気になっているようではある。



(株)LEC研究所 安楽玲子

「私の住まい — 身繕いの場」

私の住まいは仕事場から1時間半弱かかる2DKのアパートの一室です。最上階で外部からの視線がほとんど気にならない点と南向きの日当たりの良さが気に入り、13年近く暮らしています。

この部屋には私の“外では口に出せない言葉や人には見せられない顔”がギュギュに詰まっています。そのため、私は年に二回大掃除をします。徹底的に身体を動かし、サウナ十回分の汗とフルマラソン並みの腰痛に耐え、ホッと一息つく時、初めて私は自分の部屋に、家具に、自分自身に愛情を感じます。

そしていつも心に詫びる事は、今度こそ大切に残しておけるものだけでこの部屋を満たそう。そしてそのためにだけ汗を流そうということです。

そういう意味で、私の住まいは生活の場というよりは“社会”で働く一人の人間としての“心の身繕いの場”として捉えています。



(株)梓設計 石津幸子

「都会のコミュニティ」

大川端の超高層住宅の12階が住まいである。ここに転居する前は、2才になる子供を抱え、保育園経由で2時間近い通勤時間に耐えていた。今は45分で会社に着く。私の月給の7割を家賃に支払うことにはかなりの決意を要したが、結果的にお金より時間を選択し、生活にゆとりができたと感じている。

ここに住んで3年半。同じ階に12の住戸があるが、その中で話をするのは未だに3軒程度。他は顔と名前

が一致しない。この8軒の家は皆子供がいる。そう考えてみると、この地域で私が話をしたり、親しくしている人は、皆子供を介してのつきあいが発端だ。もし私たち夫婦がDINKS だったら、ここではホテル住まいをしているのと大差ないだろう。そういえば、この住棟の自治会を作ろうという運動には、私と同じ位の子供を持つ親か、リタイア前後の人が主に参加していた。都会のコミュニティとは子供と高齢者がいなくては成り立たないのかもしれないとつくづくと思う。



(脚)日本建築センター 今村芳恵

「バリアフリーハウス」

どういう訳か、私の友人には独身が多い。私のようにずっと独りだったり、離婚したり、男女を問わずそうなのである。そして最近、そんな仲間が数人集まると、リタイア後のシルバーハウスの話になることが多い。今までの経験や特技を生かしつつ助け合い、個人を尊重した楽しい老後を共に過ごす場を作ろうという話である。面白いことに、この話に花をさかせるのは女性、男性は冷やかに傍観している場合が多い。

「血縁ではない家族が住まう家」、「プライバシーが確立した施設ではないバリアフリーハウス」

家族の形が一様ではなくなり、老人社会を迎える近い将来、子供の有無、既婚・未婚に関係なく、私たち団塊の世代の女たちが半分本気で語り合っている夢が夢で終わらせないためにも、既存の常識に縛られない多様な新しい住居のあり方の必要性を感じつつ、実現することの難しさを、日々の業務のなかで実感している今日この頃である。

安藤建設(株) 渋谷和子

「住む」

7年程前、引っ越しはシンドイから今が限界だろうと家を建てることにした。今まで住んでいた木造家屋の南側にコンクリート造で、屋上のある家というのが依頼人(亭主)の注文だった。1階に駐車場と事務所、2階に居間・食堂・台所、3階に各人の寝室と洗面・便所・浴室と仏間を配した。これから年をとるのだから小さなエレベーターを付けたら、という友人達の忠告に「私は怠け者、楽な者があれば足を使わなくなるから」と付ける位置は考えたが設けなかった。ところが家が出来る前に循環器と呼吸器の疾患で入院してしまった。階段の昇りは特にきつかった。屋上で玉川の花火が良く見えると言われても昇る気にもならなかった。比較的元気になった現在、エレベーターを付けるべきかなと思っている。子供の自立後は、気のあった友人達4人位で各自の部屋を持ち、ヘルパーさんに協力してもらい、共同生活が出来たらと考えている。

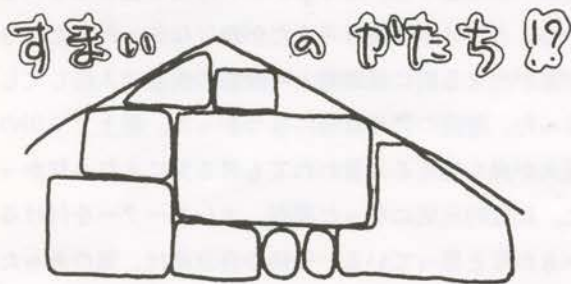


草野智恵子

「もっと自由に、もっと FLEXIBLE に」

私の今の家族は二人だけでマンション住まいです。でゆとりがあります。しかし、マンションの造りから生活のパターンが決められているような気がします。

コミュニティとのつながりが少なく気楽でありながら孤立されすぎています。将来、色々な生活のパターンが可能となる住まいの形を考えてつくっていききたいと思います。



ヘルム・ス・オバク・カッサバウムイック キャロル・マンク

「すまい」て自然なもの

現在、マンションの1LDKの独り住まいである。朝8時に部屋を出ると、再び部屋に戻るのは夜の11時頃である。マンションの方達と話すことも殆どない。

「すまい」というよりは「塙」なんだと思う。

私にとっての「すまい」の原点は、大垣の育った実家である。広い敷地でも大きな家でもない。けれど、梅・桜・ツツジ・藤・山椒・葡萄・柿と、アマリリス・ヒヤシンス・ダリア・菊……。四季折々の花と実とそれを求めてやってくる鳥や虫の音のある庭。家の中を通り抜けていく風、寒さを凌ぐために閉ざす雨戸鳥の声ひとつが家族との会話になり、数本の切り花が近所付き合いの小道具となる。見知らぬ方が「お庭きれいですね」と声をかけて下さる。そこには、人との繋がりが生じ、小さな社会が生じている。「すまいって、そんな自然の中にあるものだと思っている。」

大成建設(株) 高橋逸子

■役員会の報告

- | | |
|--|---|
| 1. 12 ('93年度第10会役員会)で(財)東京女性財団研究活動助成金の申請を決定。 | 7. 6 第3.4回役員会論議を詰める為の17委員会開催 |
| 4. 1 自主活動女性金交付決定通知。助成金 100万円。シンポジウム「家族と住まい-韓国と日本-」 | 7. 20 ('94年度第5会役員会)コア委員会案を検討。 |
| 4. 14 ('94年度第1会役員会)シンポジウムの内容・日程・会場の検討。韓国での連絡相手探し等。 | 8. 1 財団へ第2回状況報告書を提出(山田理事)。 |
| 4. 14 ('94年度第2会役員会) 同上 | 8. 3 コア委員会 最終案を詰める。 |
| 5. 1 財団への第1階状況報告書を提出(山田理事) | 8. 17 ('94年度第6会役員会)シンポジウム時間配分、会場、日本・韓国側講師の最終決定。 |
| 5. 18 韓国UIFA金華連会長、金仁淑副会長へ日韓シンポジウムの呼びかけを発送。 | 8. 23 会長と訪韓者6名による最終打合せ。 |
| 6. 7 金会長よりシンポジウムへ5名参加の返事。 | 9. 1 ソウルの龍水山レストランでシンポジウムの打合せ(韓国側6名と通訳、日本側理事6名)。 |
| | 9. 6 ('94年度第7会役員会)韓国での打合せ報告、予算書の検討、シンポジウムのPR方法の検討等。 |

■広報だより

一雨ごとに、ようやく秋の気配が感じられるようになりました。いよいよ芸術の秋、食欲の秋、そして「日韓シンポジウム」の秋です。世界でも類例のないスピードで高齢化人口国に向かっている日本では、「家族・住まい・社会」はまさに「高齢者・住まい・社会」を意味し、バリアフリーの必要性や重要性が身近なものになってきています。さて、皆さんにとって「家族・住まい・社会」とは何ですか? シンポジウムでは是非ともご意見をお聞かせ下さい。